

写真左から、教頭・千葉健史先生、教務部長・館 龍之介先生、1学年主任・吉田修介先生

思いを共有し失敗を認める土壌をつくり、先生たちが存分にチャレンジ

まちづくりをテーマに小中高大連携を進め 「人と関わる力や自己肯定感」を高める

学校を開き、学びをつなぎ
生徒に豊かな人間関係と成長を

北海道長万部高校で、先生たちが改革に踏み出した直接のきっかけは、学校存続の危機が迫ったことだ。

2016年度の入学生が20名を切り、町に唯一ある高校が統廃合される恐れが出てきた。そうしたなか、2017年度に「校種間連携」の研究指定校となり、同研究に学校存続も賭けて取り組むことになったのだ。

だが、危機感や義務感だけで改革を進めてもうまくいかないのでは、と教頭の千葉健史先生は感じた。そこで校長先生と相談し、校内に「将来構想委員会」を立ち上げ、メンバーをあえて有志から募ったという。

「先生方に自発的にチャレンジしてもらうことが大事だと思ったのです」

集まったのは20代から50代までの年代のばらけた5人の先生。その一人、教務部長の館 龍之介先生は、千葉先生と似た思いをもっていた。

「自分たちは何のためにどんなことをしたいのか、目的をもって校種間連携を進めないと、連携をするという手段が目的化すると思っていました」

そこで将来構想委員会では、校種間連携の話からは入らず、先生たちがそれぞれに抱いていた課題感や、学校でやりたいことを、ざっくりばらんに共有するところから始めたという。出てきたのは次のような思いだ。

「学ぶ意義を感じ、社会に出てからも学び続けるような意欲を育みたい」

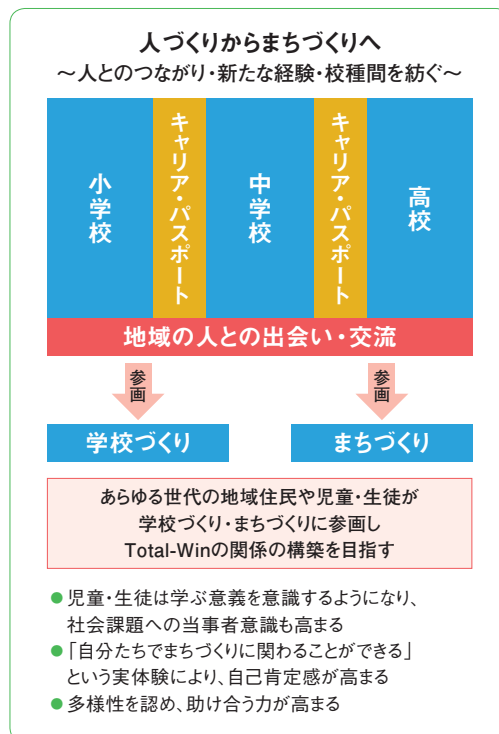
「生徒は素直で言われたことはやるが、自分で考えて動くのは苦手。自分から行動できるようにしてほしい」

「小学校からの顔なじみと過ごしてきた生徒が多く、人間関係はせまい。多様な価値観にふれさせたい」

「自信をもてずにいるところがある。自己肯定感を高めたい」

ではそのために学校は何ができるのか。構想されたのが「まちづくりをテーマとした校種間連携」だ。まちづくりで地域の人と交流するなかで、生徒が学

図1 総合的な学習(探究)の時間の12年間の取組



※学校資料を基に編集部作成

失敗を認める土壌をつくり
小中との認識共有にも努める

ぶ意義を見出し、多様性にふれ、自己肯定感も高める。とはいえ高校3年間でそれが実現するとは限らない、だから校種間連携で「学びをつなごう」。12年間を通した成長を子どもが実感し、自信を培えるようにしよう。まちづくり教育や校種間連携を漠然と行うのではなく、育成したい生徒像を見すえて進める下地ができた。

具体的取組では、まずは課題感共有のために、半日を使って全教員でじっくり話し合う校内研修を数回行った。この研修は「最終的に長万部高校のブランドデザインを全員で創り、学校教育目標を見直すことにもつながった」



写真左は「小中高合同発表会」。小学生、中学生、高校生それぞれが、まちづくりをテーマに発表し、地域の人も交えてお互いに聴き合うこととしている。写真右は「町研サークル」。小中高の先生が、教育課程、学習、生徒指導、特別支援という4つのテーマに分かれて年3回交流している。

小中高合同発表会の感想

- **小学6年生**
まちを良くするために色々提案していたので、良いと思いました！ 高校生の発表はわかりやすくてすごかったです。
- **中学2年生**
小学生の発表を聞いて、新鮮でしっかりと練られていて「なるほど〜」と考えさせられました。今、高校生が頑張ってる今後の長万部のために色々と考えたり、話し合ったりしてる姿を見て、自分も少しでも力になれるよう、高校生の協力をしたいと思いました。
- **高校1年生**
小中学生どちらの発表もすごかったです。自分が小中学生のときは、こんなに話せなかったと思います。発表は緊張したけれど、小中学生や地域の人に伝わっているといいなと思います。今後アクションにうつるので、継続できるアクションにしたいです。
- **小学校教員**
小学生・中学生・高校生が集まる中で頑張ってる発表していたと思います。長万部町の未来のためにずっとみんなが語り合えたら素敵ですね。
- **中学校教員**
小学生、高校生どちらもしっかりと考えてきた様子が感じられ、非常に頑張っていました。質問に臨機応変に答えるのは大人でも難しいことですが、特に高校生はよく答えていたと感じました。勉強が苦手でも、うまく話したり対応したりできる子もいました。色々な経験をしてそれぞれが自分の特性に気づいていききっかけになる場面ですね。

まちづくりをテーマにした校種間連携には、全員が賛同していたわけではなく、乗り気でないことを表明していた先生もいる。でも館先生は「全員が同じ意見のほうがおかしくて、異論があるから自分たちの取組を問い直せ」と前向きに捉えたという。

「意見は違っても、協力できるところを探してお願ひすると、実はやってくれるんですよ。まちづくりという手法には反対でも、育成したい生徒像は共有できているので」

取組を促進した側である先生の思

**異論があるから問い直せる
思いは多様でも協力できる**

子どもが自分を振り返り、教員が子どもの変化を理解するのにより生かせると思っています」

「当初は小中高で『キャリア』の捉え方はバラバラでした。その認識を揃えて1本筋を通せば、キャリア・パスポートは、子どもが自分を振り返り、教員が子どもの変化を理解するのにより生かせると思っています」

「本校の先生と生徒がこれだけがんばって挑戦し始めているのだから、この活動を小中学校や地域にも広げたい、というのが管理職の自分の一番のモチベーションでした」(千葉先生)

取組を通して強まった思いもある。

「小中高合同の活動では、児童・生徒が上や下の世代にふれるなかで、先を見通したり、過去を振り返って成長を実感したりします。教員も関わった児童・生徒の先の姿にふれて、これまでの成果や課題を見出せます。加えて、各校種の教員が成長を見取ること自体が、子どもの自己肯定感を高めるようなのです。そういう場面を今後もつくりたいと思いました」(館先生)

長万部町には東京理科大学のキャンパスもあり、長万部高校は同大学とも連携してきた。今後はまちづくりでも小中高大の連携を図ろうとしているところだ。「学校を常に進化させる」。学校を存続させ、魅力を高めるには、その視点が必要ではないかと千葉先生は思っているという。

(千葉先生)という。

まちづくりをテーマに「地域の人を巻き込む」ことも館先生たちが進めた。継続が危ぶまれていた町の行事を、生徒が地元の人と一緒に企画運営する活動を始めた。地元で働く人を講師に招き、町の課題を語ってもらった。

「思い切った動けたのは管理職の先生方がその土壌をつくってくれたからです。『まずやってみて駄目だったら改善しよう』と言いつづけてくれたんですよ。慣例にとらわれずやってみて、失敗があればやり直す、という姿勢を僕らが見ると、春に小中高合同の教員研修も実施。研究指定校2年目の2018年度に減らし納得感を上げられるよう、提案の微調整もしました」

「小中の教頭が揃う町の教頭会に参加し、小中への連絡事項があれば直接訪ね、職員室でもお話をしました。そのなかで高校側の提案を小中の先生方がどう感じているか把握し、負担感を減らし納得感を上げられるよう、提案の微調整もしました」

「小中の教頭が揃う町の教頭会に参加し、小中への連絡事項があれば直接訪ね、職員室でもお話をしました。そのなかで高校側の提案を小中の先生方がどう感じているか把握し、負担感を減らし納得感を上げられるよう、提案の微調整もしました」

「小中の教頭が揃う町の教頭会に参加し、小中への連絡事項があれば直接訪ね、職員室でもお話をしました。そのなかで高校側の提案を小中の先生方がどう感じているか把握し、負担感を減らし納得感を上げられるよう、提案の微調整もしました」

「理科の教員として小中の理科教育にも興味があり、校種間で学習面の連携もしたかったです。もう一つ、進路の面では、学校目線だけでなく、地域で生きる人の価値観も踏まえて子どもと接したいと思っていました。校種間連携やまちづくりをテーマとした協働は、そうした縦と横のつながりを築くものだと思うのです」(吉田先生)

「本校の先生と生徒がこれだけがんばって挑戦し始めているのだから、この活動を小中学校や地域にも広げたい、というのが管理職の自分の一番のモチベーションでした」(千葉先生)

取組を通して強まった思いもある。

「小中高合同の活動では、児童・生徒が上や下の世代にふれるなかで、先を見通したり、過去を振り返って成長を実感したりします。教員も関わった児童・生徒の先の姿にふれて、これまでの成果や課題を見出せます。加えて、各校種の教員が成長を見取ること自体が、子どもの自己肯定感を高めるようなのです。そういう場面を今後もつくりたいと思いました」(館先生)

長万部町には東京理科大学のキャンパスもあり、長万部高校は同大学とも連携してきた。今後はまちづくりでも小中高大の連携を図ろうとしているところだ。「学校を常に進化させる」。学校を存続させ、魅力を高めるには、その視点が必要ではないかと千葉先生は思っているという。